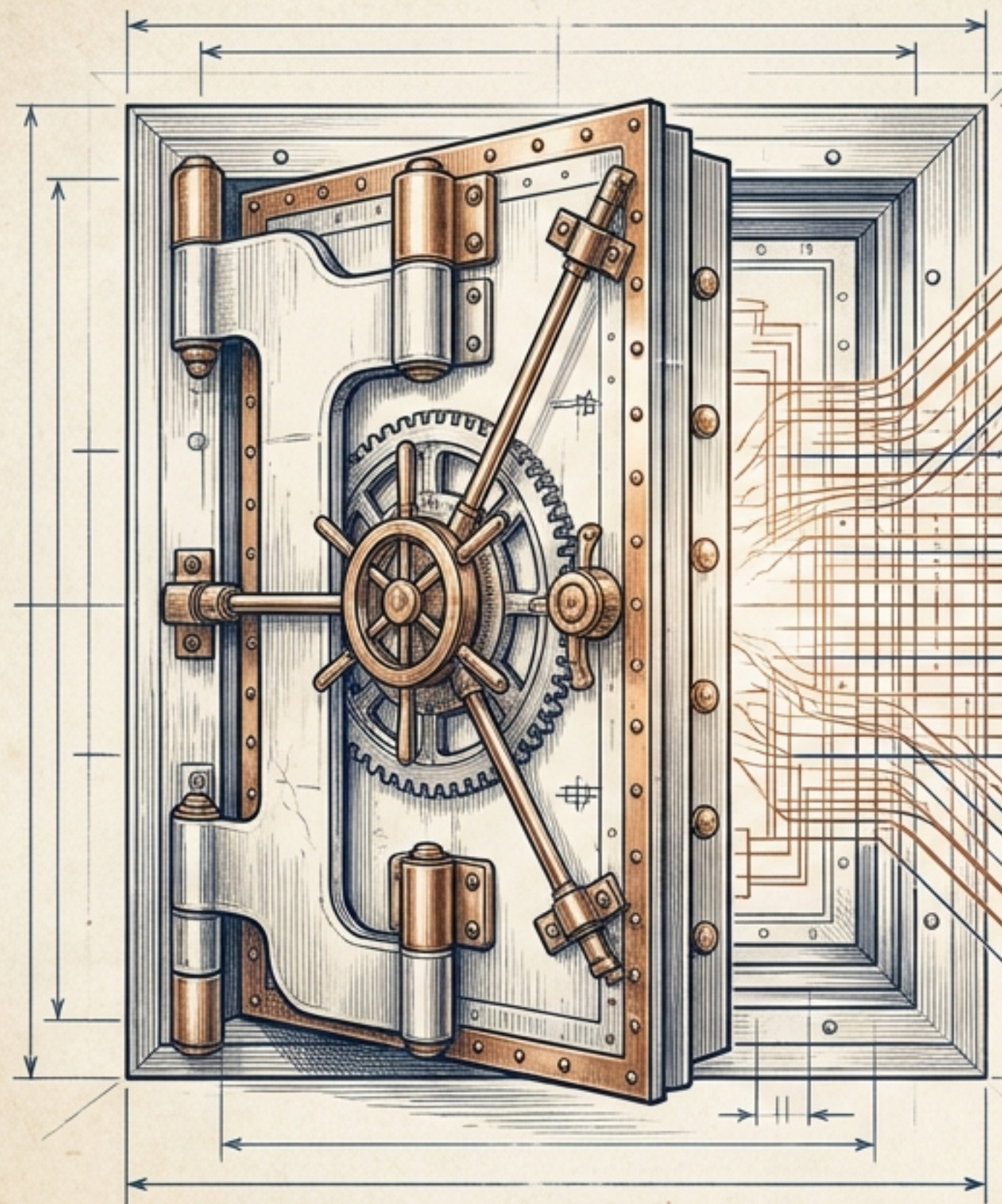


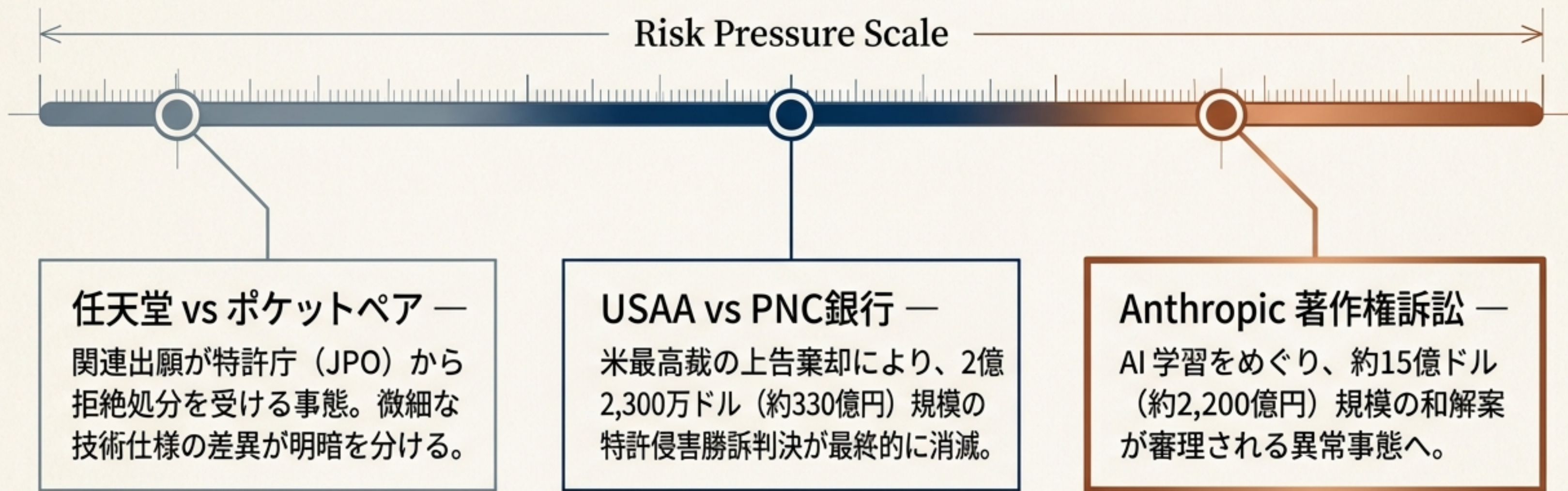


特許AIの解剖学： Stiltaが暴く知財 市場の再構築

レガシーな特許実務を破壊する
「エージェント型AI」の構造と戦略的価値



知的財産は「高リスクな地雷原」へと変貌した



知財の有効性判断は、微細な法解釈に依存し、その判断ミスが致命的な財務リスクに直結する時代に突入している。

レガシー市場を穿つエージェント：Stiltaのプロファイル

設立と基盤

2025年後半設立（スウェーデン・ストックホルム拠点）。特許実務における「Cursor（先進的AIエディタ）」を目指す。

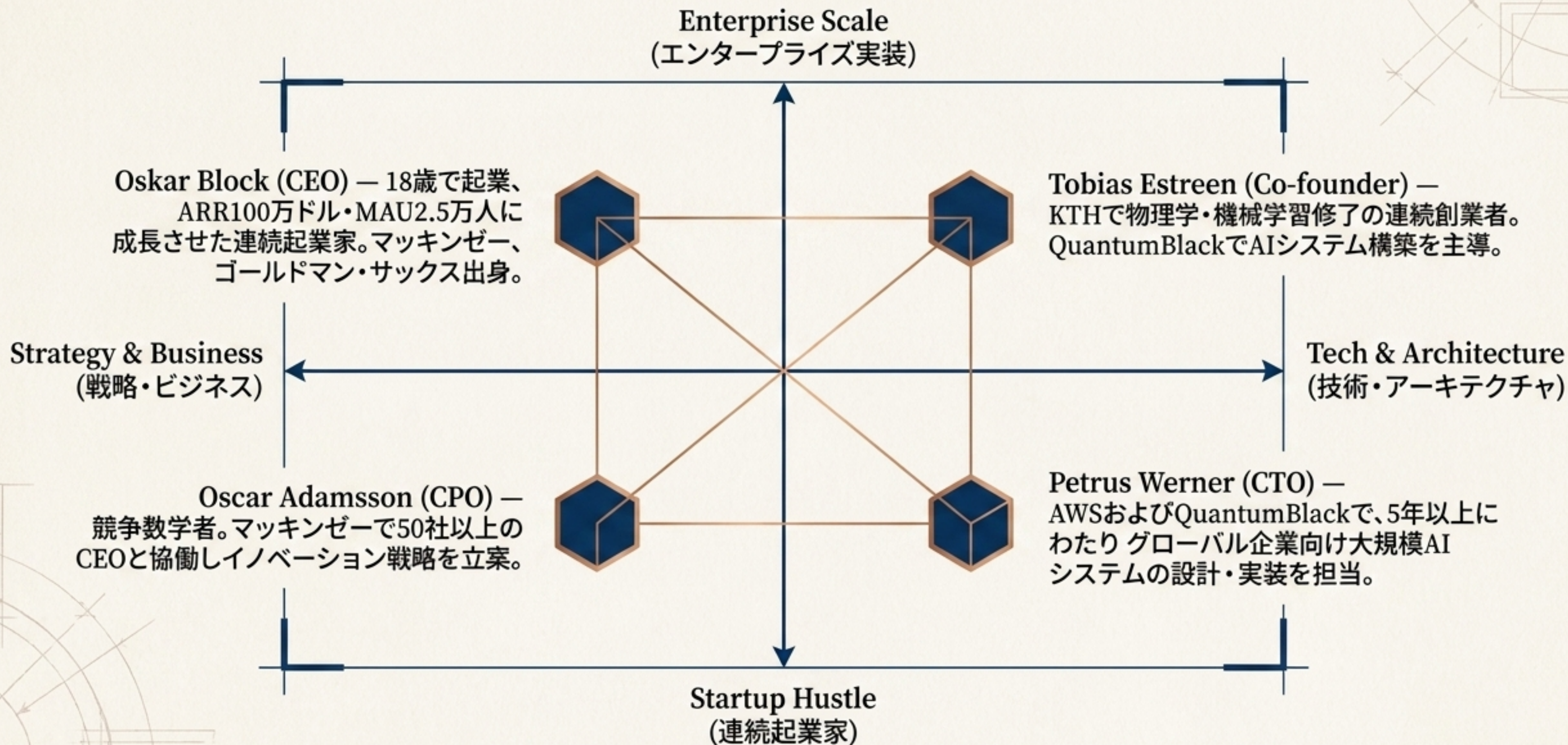
資本と支援

設立からわずか7ヶ月後の2026年5月、シードラウンドで1,050万ドル（約17億円）を調達。競合オファーを辞退し資本構成を最適化。

投資家陣

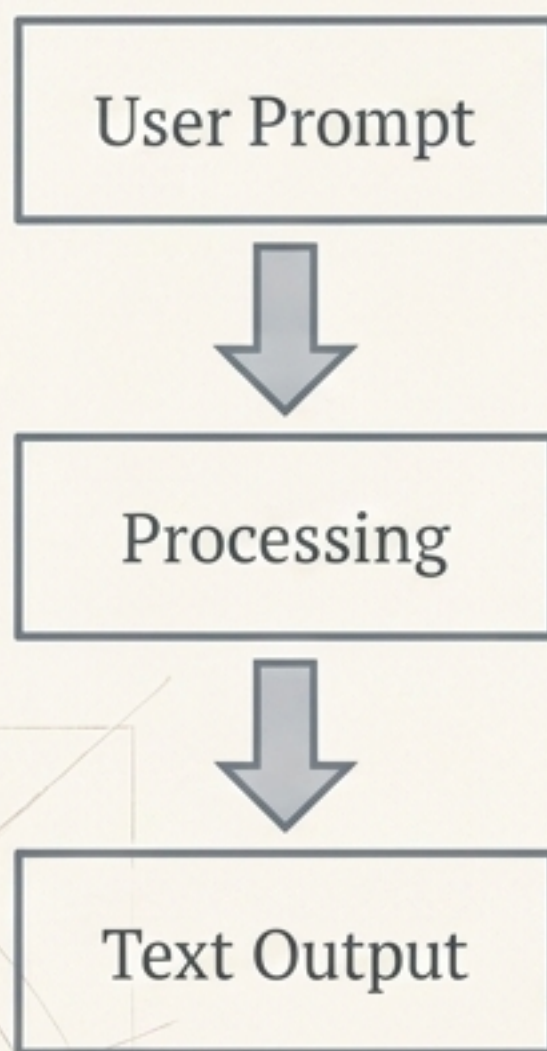
Andreessen Horowitz (a16z) がリード。Y Combinator (W26)、OpenAI主要メンバー、Legora/Lovableらリーガルテック実務家が参画。

「戦略」と「自律AI」を結合するマッキンゼー・マフィア

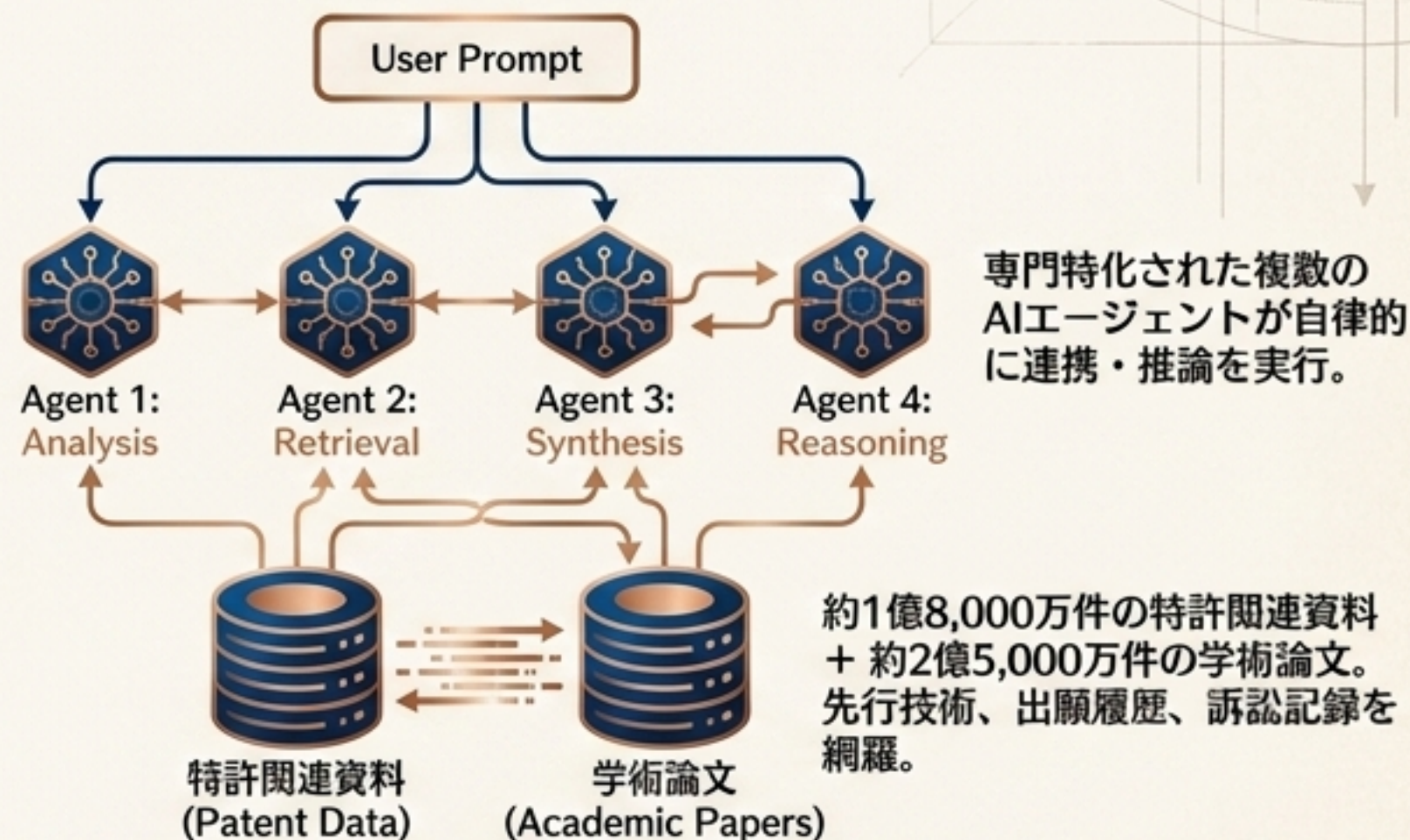


単一プロンプトからの脱却：並列推論エージェントの威力

従来のチャットボットLLM
(Legacy Chatbot LLM)



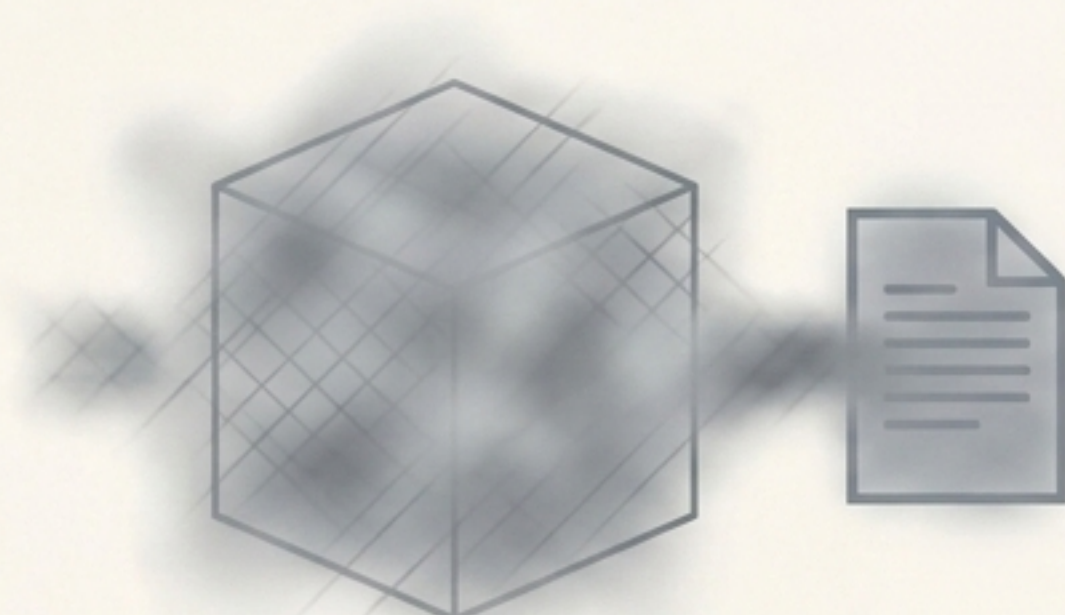
並列推論エージェントネットワーク
(Parallel Agentic Network)



専門家チームが数週間要する「1特許に対する868件の先行技術 (Prior Art) 特定」を、約30分で処理 (デモ実績)。

ブラックボックスから「監査可能な証拠チェーン」へ

Black Box
LLM



従来のLLM — 出力結果の根拠が不明瞭であり、訴訟や交渉などの「ハイステークス(高リスク)」な局面での利用はハルシネーションのリスクが極めて高い。

Auditable
Citation Chain

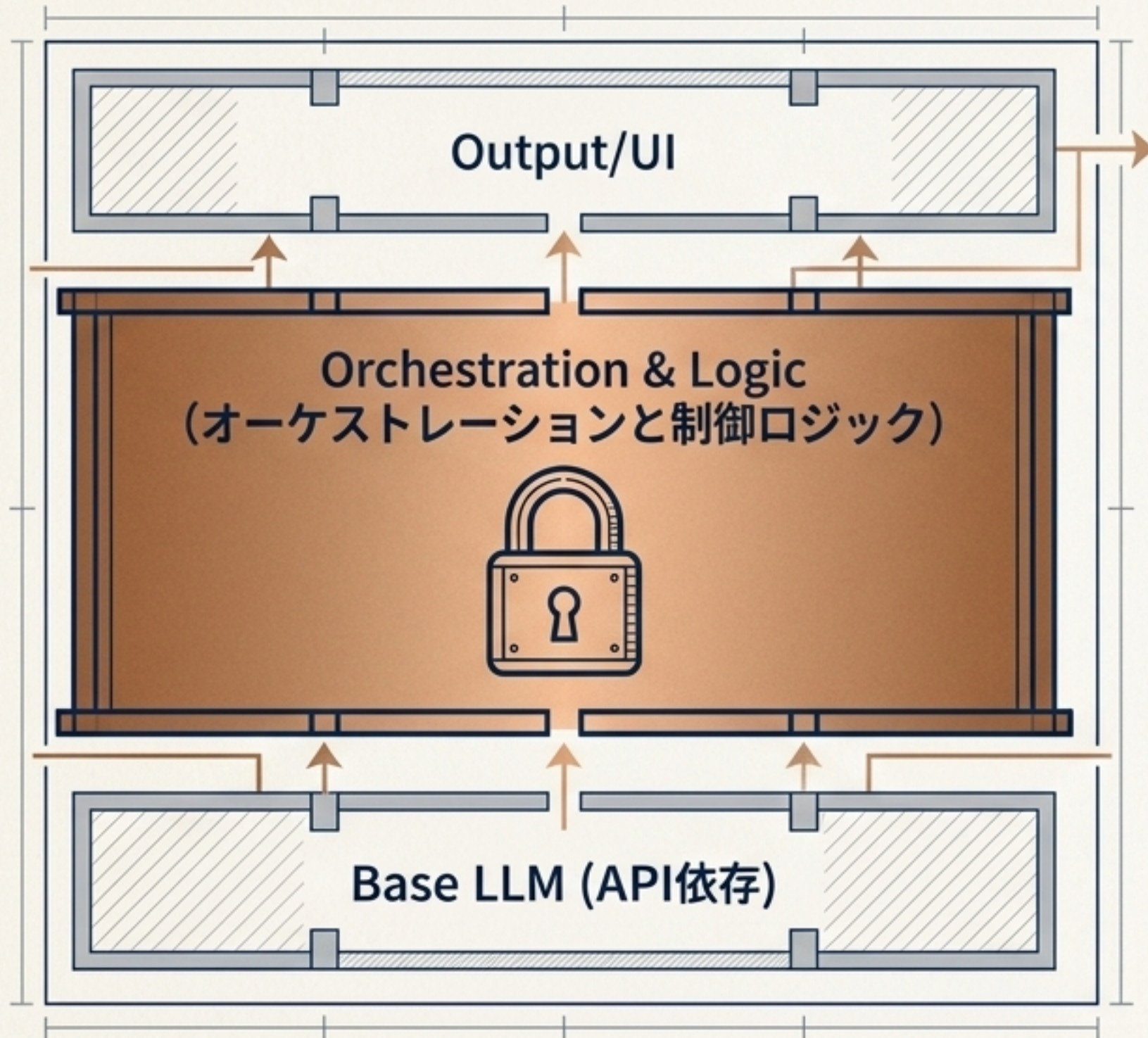


AI Claim
& Analysis



StiltaのAuditable設計 — 各分析結果（クレームチャートなど）に正確な根拠資料（ソース）や引用箇所を視覚的に紐付け。専門家（弁護士・弁理士）による検証と法的最終判断プロセスを前提としたアーキテクチャ。

エージェントAIそのものが「新たな特許の主戦場」となる



- 従来のAI特許は、学習データの構造やモデル自身のアーキテクチャ改良が主戦場であった。
- 現代のAIエージェント（Stilta等）は既存のLLMをAPI経由で活用する。そのため、権利保護の焦点は「システム構成」「タスク処理手順」「ツールを自律的に動かす制御ロジック」へと地殻変動を起こしている。
- 高度なマルチエージェント協調システムを構築する「オーケストレーション技術」こそが、次世代の知財における最大の防御壁となる。

防衛コストを「収益アセット」に錬成するビジネスモデル

「眠った特許（デッドストック）」
維持手数料のみを支払い続けている
未活用のポートフォリオ。

特許、侵害、間やな状態のアセットから
の標準を創出。



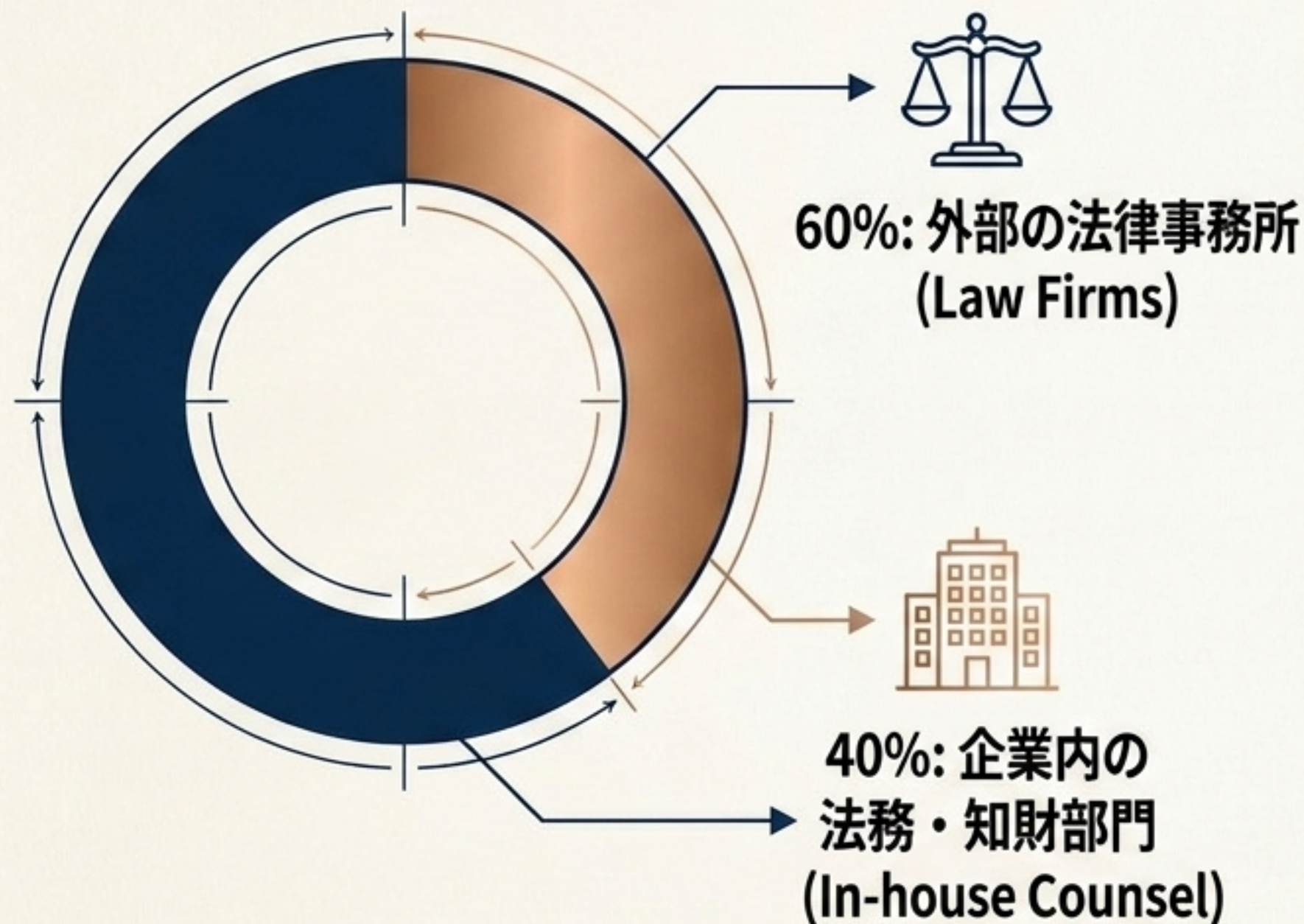
自動探索：休眠状態のアセットから、再活
用の余地がある特許をAIが自動発掘。

侵害検出・監視：公開された他社製品や特
許出願を監視し、（侵害）の可能性を検知。

FTO分析・ライセンス抽出：自由実施（
FTO）の評価支援と、技術的親和性の高い
ライセンス供与先の抽出。

強硬な訴訟モデル（パテントロール）
ではなく、協調的なライセンス交渉を
通じた「収益アセット」の創出。

グローバル・エンタープライズとトップ法律事務所への浸透



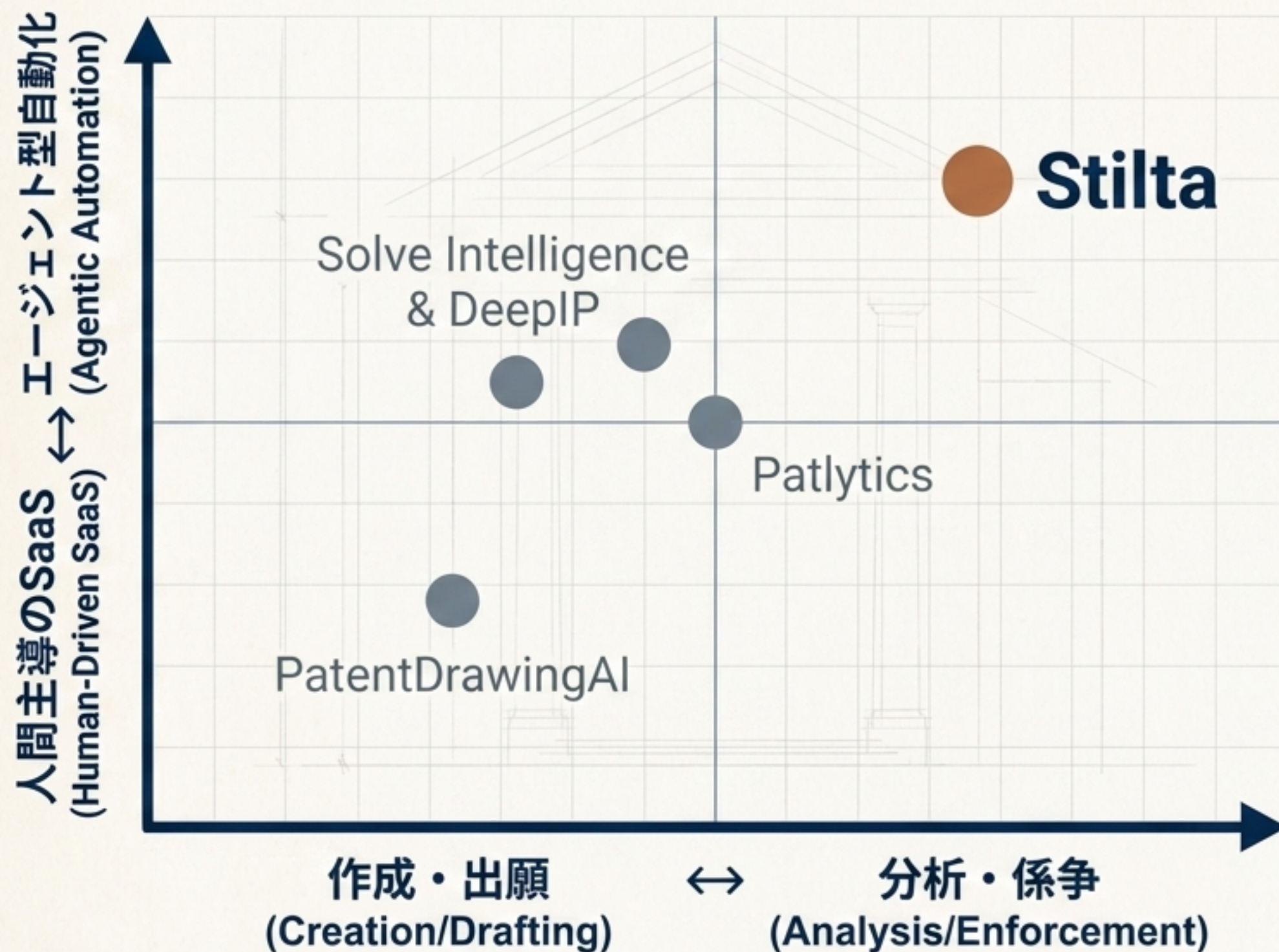
エンタープライズ顧客：スイス製薬大手Roche、デンマーク海運物流大手Maerskなどが顧客または検証パートナーとして参画。

リーガルファーム：世界最大の特許法律事務所トップ5のうち、すでに3社が導入済み、あるいはアクティブな実証実験（PoC）段階に到達。

リーガルテック・コンペティティブ・ランドスケープ

企業名	調達状況	コア・バリュープロポジション	ターゲット層
Stilta	シード 1,050万ドル	並列エージェントによるFTO分析、 侵害検出、検証可能な先行技術探索	法律事務所・大企業の 知財部門
Patlytics	シリーズB 4,000万ドル	知財ワークフロー全体の総合的な管 理・自動化プラットフォーム	大手法律事務所・企業 知財チーム
Solve Intelligence	シリーズB 4,000万ドル	特許明細書・クレーム作成（出願ド ラフト）に特化したAI共同編集	弁理士・特許出願実務者
DeepIP	シード（非公開）	出願フェーズのドラフト作成・オフィ スアクション（拒絶理由通知）対応	特許事務所・企業の出 願チーム
PatentDrawingAI	ブートストラップ	特許図面（ドローイング）の自動生成 のみに特化	個人発明家・低予算の 事務所

ポジショニング：分析と自動化の極致へ



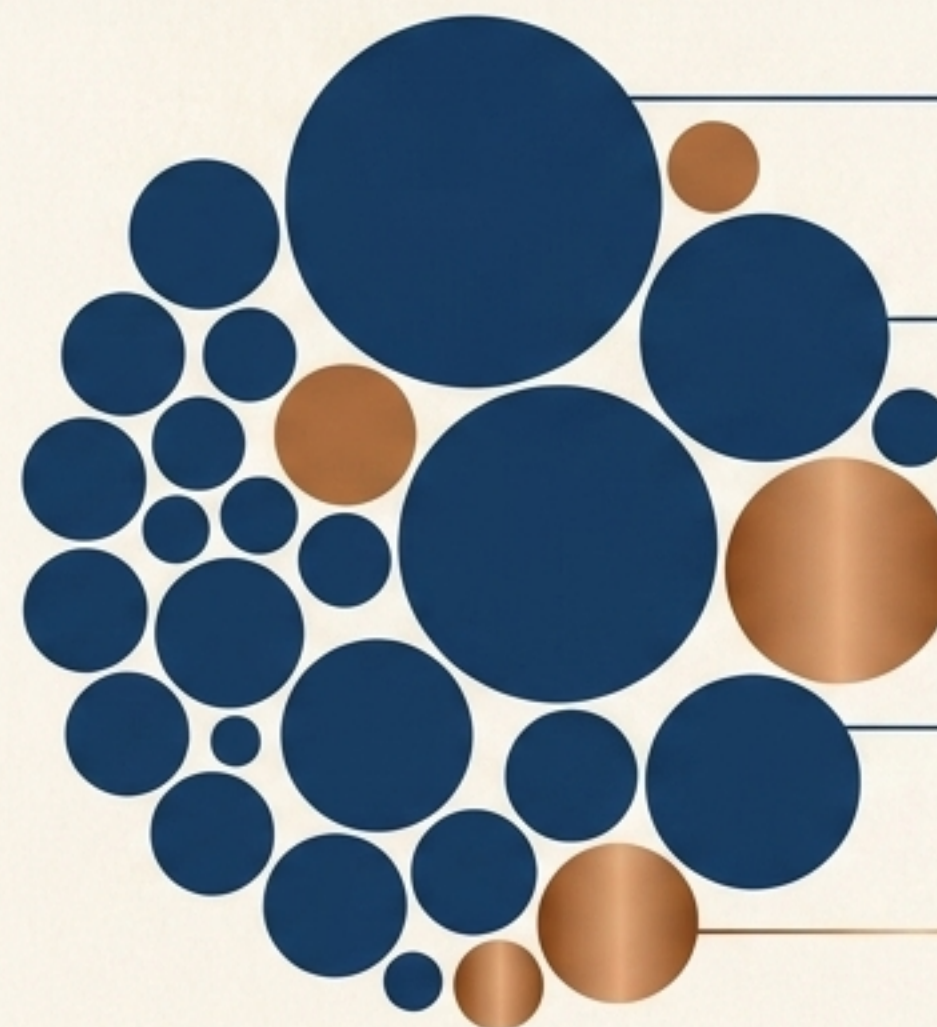
競合が「出願ドラフト（作成）」領域に集中する中、Stiltaは最も法務リスクが高く、収益化に直結する「FTO分析・侵害検出・係争」領域におけるエージェント自動化にフォーカスしている。

2026年投資トレンド：「ラッパー」の終焉と垂直AIへの資本集中

汎用LLMラッパー (Generic LLM Wrappers)



特化型バーティカルAI (Specialized Vertical AI)



Entire (開発ツール) :
6,000万ドル (シード)

Gradium (音声・医療) :
3,000万ドル (シード)

Alta (マーケティング) :
2,500万ドル (シリーズA)

Tangos AI (金融犯罪) :
2,000万ドル (シード)

Stilta (特許・知財) :
1,050万ドル (シード)

2026年のリーガルテック投資は、初期のバブルを脱却。単純なチャットボットではなく、専門データベースと深く統合された「バーティカルAIエージェント」へ巨大な資本確信 (Convictions) が集中するバーベル構造となっている。

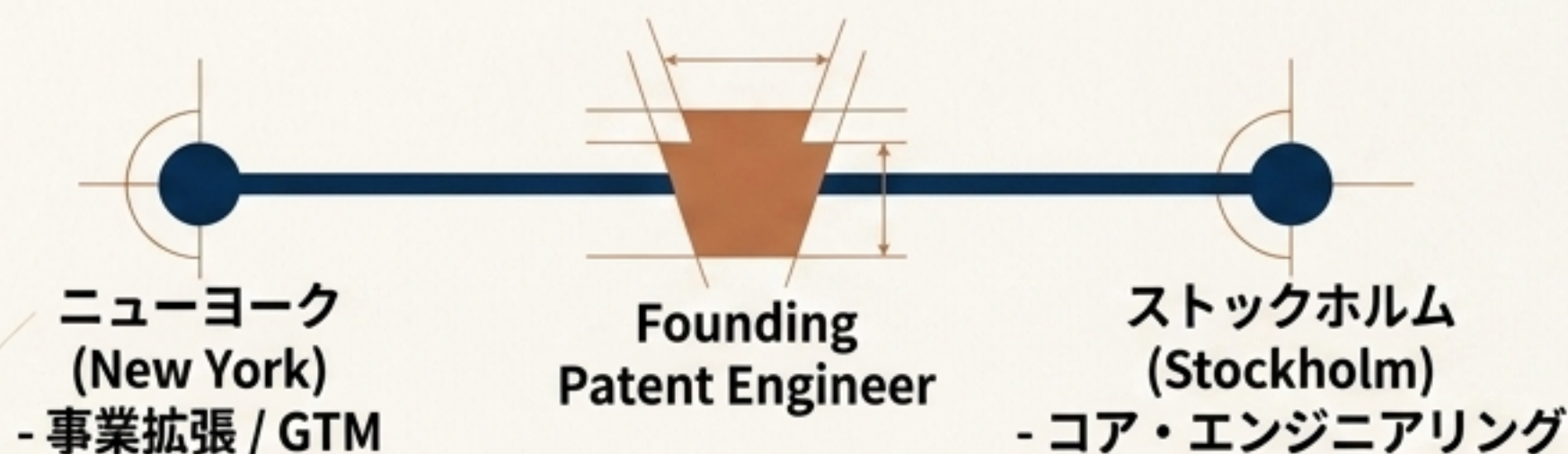
AIと法の架け橋：「特許エンジニア」という新職種

調達資金を活用し、主要市場である米国と開発拠点の欧州で採用を加速（給与水準10万～20万ドル＋株式）。

Role 1: Founding GTM: 大企業・法律事務所向けの事業開発（NY/STO）。

Role 2: Founding Engineer: エージェントアーキテクチャの実装（STO）。

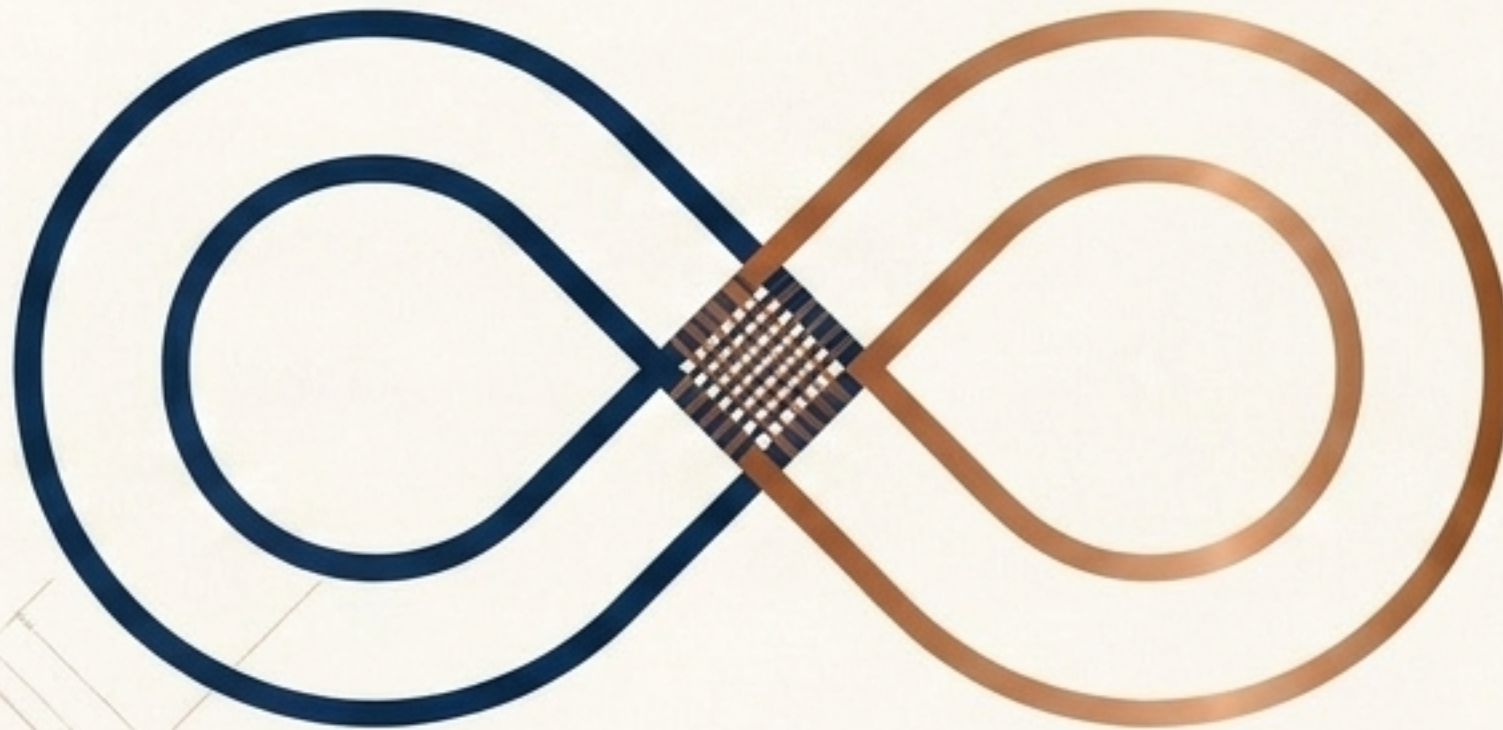
Role 3: Founding Patent Engineer（特筆事項）：実務経験3年以上の知財プロフェッショナルを募集。単なるユーザーではなく、AI出力の法的な正確性を検証・保証し、技術と法律の断絶を埋める極めて重要な「翻訳者」としての役割を担う。



変革の条件：ヒューマン・イン・ザ・ループの必然性と未来

エージェント型AIの
並列処理能力

人間の専門家による
厳格な監査



AIの限界と人間の役割: AIが提示するクレームチャートやFTO分析を盲信することはハルシネーションの致命的リスクを伴う。実務での完全な機能には、弁護士・弁理士による厳格なレビュー（Human-in-the-Loop）が不可欠。

真の価値創造: Stiltaの真価は「特許調査の高速化」にとどまらない。「眠った特許」の再活性化モデルが、実際のロイヤリティ収入や有意義な合意形成へと結実するかどうか、中長期的なマイルストーンとなる。

結論: 知的財産が「防衛コスト」から「収益アセット」へ転換する地殻変動において、Stiltaは最も強力な触媒（カタリスト）の一つとして機能する。